

地域と協働する施設 —墨田サテライトキャンパス—

千葉大学×墨田区



本キャンパスは、地元企業等（墨田区）の参入等を促進し、より強固な産学官連携が行われる共創拠点としての役割を担う。
墨田区や隣接大学、公民学連携組織等と連携し、墨田区が抱える地域課題をテーマとした実践的な教育研究の実施や、大学の持つ専門性や知見が導入・展開されるほか、学生と連携した取り組みが行われることで、地域の活性化につなげる。



すみだメディアラボ
(旧西吾嬬小学校跡地)
学校法人電子学園が最先端のICT研究や、オンラインで活用可能な教育コンテンツ等の開発と発信を行う施設。

キャンパスコモン
大学と地域の交流が生まれる広場。憩いの場でもありながら、イベントなどのさまざまな活動が行われる場に。

大学の町のあるトイレ
コンペで選ばれた千葉大学の学生のアイデア「小径と光のトイレ」をもとに、あずま百樹園・キャンパスコモン整備事業で設計に反映。令和6年度内に公園トイレとして設置する予定。

大あずま百樹園
区の都市公園。キャンパスコモンと一体整備し、まちのシンボルとなるような緑豊かなスペースに。

IU情報経営イノベーション専門職大学
(旧曳舟中学校)

千葉大学
(旧すみだ中小企業センター)

墨田サテライトキャンパスの活動事例

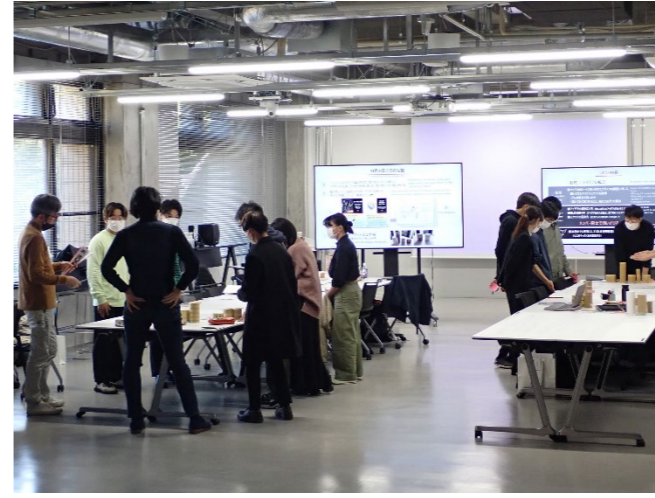
ランドスケープスタジオ



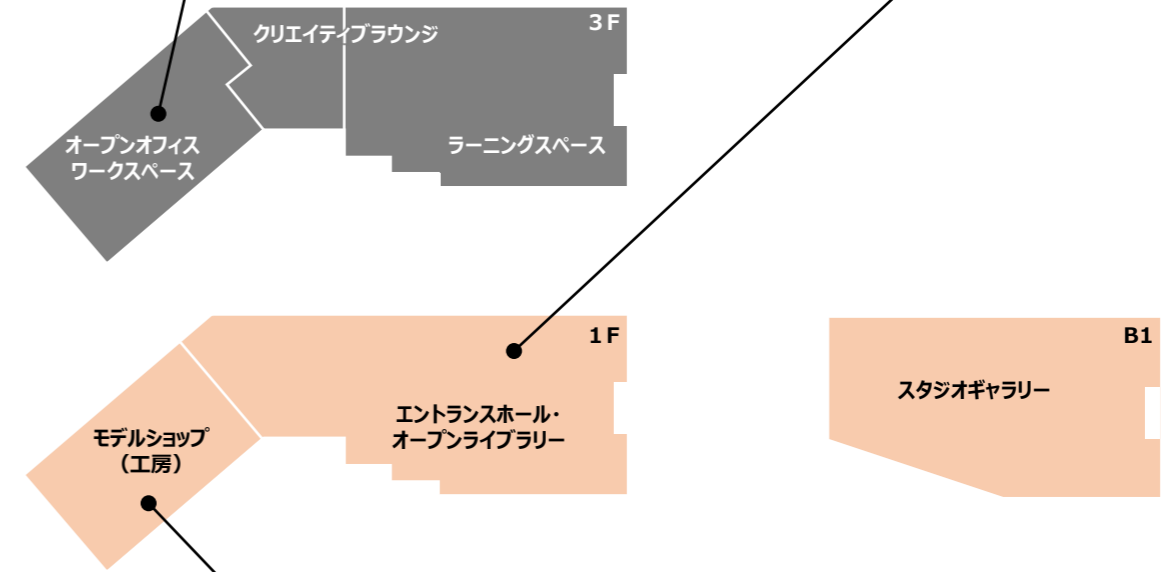
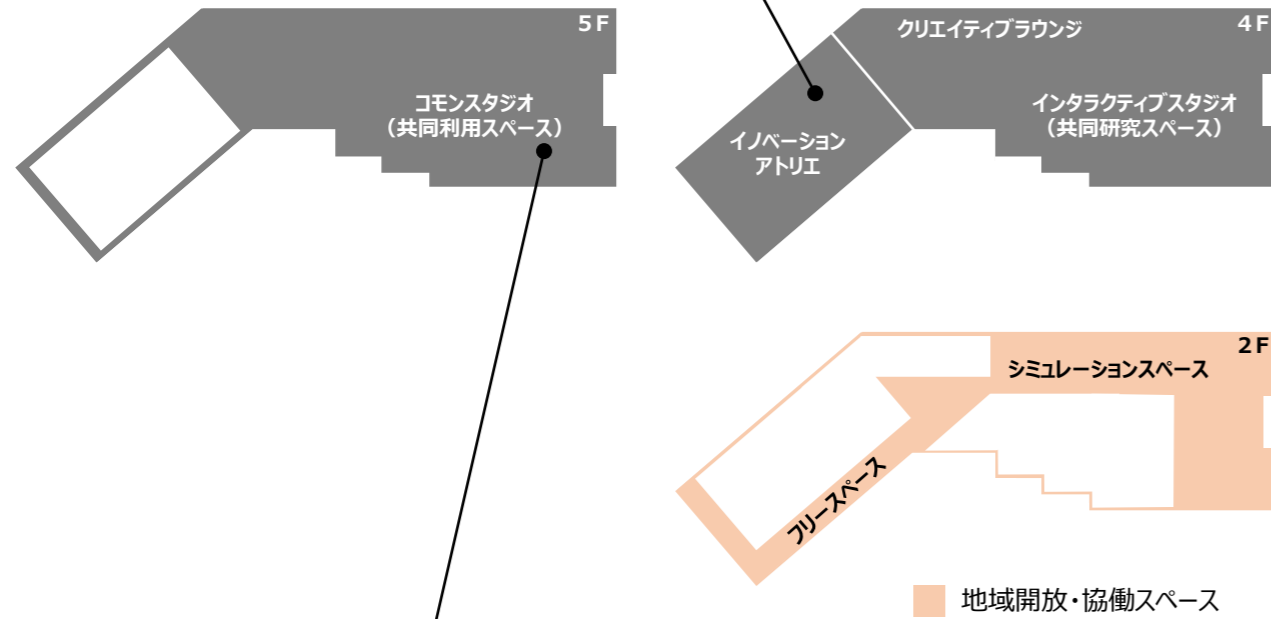
建築スタジオ



デザイン演習



墨田区ワクチン会場



プロジェクト研究システム什器



植物工場研究成果とのコラボレーション什器



デジタルファブ리케이션1



デジタルファブ리케이션2





Concept

【構想】

千葉大学

墨田サテライトキャンパスを設けた理由、整備に至るプロセス

・高度な教育研究を展開するため、最新の文化等が集まり、実践的な教育研究のために連携が必要な高度実務家等が多数在籍している東京都内において、地域の具体的社会課題の解決を通じた実践型教育研究が可能な新しい活動拠点を模索していたところ、誘致の話があり、設立を決めた。大型シミュレーションが可能な大規模空間など、本学の既存施設が有していない特徴的なスペースを擁する点も魅力であった。

・キャンパス開設前から、墨田区での遊具デザイン協力、古民家リノベーションなど、本学の教員は独自に地域連携の取り組みを行っていた。また、他の地域で実践してきた研究が墨田区が抱える課題解決につながるものもあり、より実態に即し、実績に裏打ちされた整備方針を定めることができた。

墨田区

・従来、墨田区には23区で唯一、大学がなかった。墨田区はものづくりが盛んで、従前から大学の知を活用した産官学連携による産業施策を実施していた。

・これまで複数の大学と連携の取り組みを行ってきたが、区内にキャンパスがないため、機能的な連携に留まり、継続的な取り組みに課題があった。

・平成20年に、これまで陸上競技場を整備することとしていた旧西吾にしあづま婦小学校及び旧曳舟ひきふね中学校跡地に大学を誘致する方針を決定した。

公募等を実施するも、長らく誘致は実現しなかったが、平成29年に千葉大学と包括協定を結んでからは一気に動き出した。

完成までの失敗と解決

・墨田区から借用して開設するキャンパスのため、「地域に開かれたキャンパス」というテーマの実現が重要だった。大学目線のみでの考えでは実現が困難であったため、墨田区並びに関係団体等との意見交換を十分に行うことで、そのコンセプトが体现できるキャンパスの実現を目指した。

・旧すみだ中小企業センターを大規模改修するにあたって、大学の知見を取り入れながら設計を進めた。当初は公共施設としての視点と大学側のユーザー視点で協議は難航したが、キャンパスの一部を区民が利用できる空間とするなど、双方の利益になる仕組みを構築し、これまでにない新しいキャンパスとして整備した。

連携による効果・成果

・周辺に拠点を持つ複数の企業との共同研究を墨田キャンパスにおいて行っている。様々なシミュレーションなど、企業内では難しい研究開発活動が実施できることで、官民学連携の強化を促している。

・千葉大学教員・学生が地元企業や商店街において調査や研究成果の社会実装を実施している。例えば「下町人情キラキラ橋商店街」と環境デザイン研究室の教員・学生が協働するほか、NPO法人と連携した子ども向けワークショップなどを通じて地域活性化に取り組んでいる。

・社会貢献活動の一環として、墨田区と連携し、新型コロナワクチンの接種会場としてキャンパスを区に提供した。地域貢献以外にも、会場の案内サインがレッド・ドット・デザイン賞を受賞し、グッドデザイン賞ベスト100に入選するなど研究面でも成果があった。都内での本学のプレゼンス向上にも大きく貢献していると考えられる。

・地元企業や商店街と大学との連携活動により、地域活性化に寄与している。

・千葉大学と事業協定を結んでおり、新型コロナワクチン接種会場のサインなど公共施設のサイン計画を依頼しているほか、墨田区基本計画のデザイン監修も依頼している。

・今回拠点を設置してもらって大学の敷居が下がり、デザインなど専門的な相談を気軽に行えるようになった。

・公民学連携組織「UDCすみだ」が建物内に事務所を置いて活動を始めている。周辺のキャンパスコモン、百樹園、トイレ整備などに関わってもらっている。

費用対効果

・賃料、維持管理費などのコストが新たに生じたが、都内拠点の設置の実現、官民学による連携、地域企業・住民が持つ社会課題解決を通じた実践的教育研究と人材育成等が可能となり、これまでにない新たな成果が見込まれている。

・閉館した旧すみだ中小企業センターを墨田区が建物改修工事を実施し、千葉大学に定期建物賃貸借契約により貸付けを行っている。

・空洞化の可能性もあった未活用資産の有効利用、地域に根付いた学生の活動、デザイン等大学「知」導入による地元企業・地域活性化、それらを30年間に渡って享受できることを考慮すると、費用負担を越える効果が見込める。

墨田サテライトキャンパス紹介動画
(YouTube墨田区公式チャンネル)
#72【すみだのそここが知りたい】大学のあるまちづくり
千葉大学 墨田サテライトキャンパス編

YOUTUBE 千葉大学 墨田区



千葉大学

千葉大学 企画政策課
墨田キャンパス設置準備事務局（当時）

室伏 雄介

文部科学省へ出向の後、2020年4月に千葉大学企画政策課墨田キャンパス設置準備事務局に着任。墨田サテライトキャンパスの開設及び墨田キャンパスを拠点に活動する教育研究組織の組織整備を担当。

墨田区

墨田区
企画経営室

飯田 晃英

東日本大震災被災自治体（仙台市）へ出向し、その後、墨田区の防災施策を担当した後、平成31年4月より墨田区企画経営室（現職）に着任。大学誘致及び大学連携を担当。

—— 墨田区と千葉大学が手をつないだ始まりについて教えてください。

（墨田区）墨田区としては、やはり23区内で唯一、大学がないことが課題でした。他の自治体に所在する大学との機能的な連携は行ってきただけですが、物理的な距離があるため、安定した取り組みは難しかったです。また、区内の産業活性化や人材育成のために、大学が持つ高度な知見が欲しかったということもあります。自治体の役割の一つは、住まう人々や企業を様々な面で支援していくことですが、例えば産業空洞化一つをとっても少子高齢化、産業構造の変化、需要の移り変わり、教育の問題など課題は複合的なので、多角的に分析して総合的に解決していかないと、どこかに歪みが生じます。そのため知見を得たいと思っており、特に千葉大のような総合大学に来てもらえればという区の想いがありました。

（千葉大）確かに千葉大学には10の学部や多数の教育研究施設等があり、多様な教育研究活動が展開されています。その成果が墨田区はじめて社会に役立つのは、社会還元という意味で非常に大きいです。また、大学としても、東京都内に拠点を構えることで、学生や教員、企業、地域など多様な人々との新たな交流により教育研究の発展が期待でき、さらには町というリアルな場で実践的な活動が展開できることが魅力でした。それがこの連携関係の始まりにあると思います。

—— 墨田区と千葉大学、それぞれに異なる課題

やニーズがあったのですね。それが一つの事業の中で相補的・相乗的に解決できる形となっている点、連携がうまく働いているということが言えますね。

千葉大学と墨田区が協力体制を敷くうえで、どのような点に苦労しましたか。

（墨田区）やはり特別区と国立大学では組織構成が違うので、それぞれの目的が実現されるよう、大学と区の調整はもちろんのこと、区内の調整も大変でした。

（千葉大）それは同じですね。本学としては企画政策課が全体をハンドリングすることを明確にして、墨田区の意見、要望や学内整理等をワンストップで対応できるようにしました。また、着工の直前あたりから墨田キャンパス設置準備事務局という組織を立ち上げ、キャンパス改修というハード面と、その施設活用の学内組織整備というソフト面両方の横断的な旗振り役を担うことで、キャンパスを効果的に、効率的に整備、活用する検討をスムーズに行うことができました。

（墨田区）墨田区では、企画経営室が各所からニーズを吸い上げて、大学と協議をして繋げる役割を担当しています。同室は区内の各部署に横串を通せるセクションで、産業・教育・建築など関連する様々な部署を統括する働きもしています。ですから、区が一つにまとまって大学と調整を行うためには合理的な体制だったと思います。カウンターパートである墨田キャンパス設置準備事務局には

とてもお世話になりました。また、案件によっては担当理事やキャンパスでの活動を企図する教員の方と直接お話することもありました。

—— それぞれの担当部署を明確化する。基本的ではありませんが重要ですね。

これだけ大きな案件だと、両者の調整全てがスムーズにはいかなかったと思います。大学と区、関係者の調整で苦労した事例があれば教えてください。

（千葉大）「地域に開かれたキャンパス」の実現ですね。これまで地域の方々に愛されていた旧中小企業センターを改修してキャンパスにすることもあり、地域住民の方々を含め施設改修、活用について色々ご意見いただきました。

（墨田区）そこは区としてもぜひ実現したい、しなければならなかったところでした。もちろん、大学のキャンパスなので、全てを地域にオープンにすることは難しいと考えていましたが、地域が大学を身近に感じることができ、大学が墨田区にきた意義を関係者に理解いただくにはどうしたらよいかを大学側と何度も協議しました。こうして議論を重ねたことが、公民学連携組織「UDCすみだ」の設置、連携にも繋がったのだと思います。

—— 確かにこの実現にはそれぞれの立場だけではなく、両者の協力が不可欠ですね。こうした点を含め、具体的に施設整備で苦労したのはどのような点でしょうか。

（千葉大）全学組織であるキャンパス整備企画室が主に設計を監修したのですが、私はその設計と実際に活用する教員、事務職員との調整が主な役割でした。これまでの教育研究施設とは異なるコンセプトを掲げ、そこで行われる新たな教育研究活動等を具体的にイメージしながら施設の在り方を検討することは大変でした。例えば、「地域に開かれたキャンパス」という観点では、区が大学を誘致してきた大学周辺のエリアも含めて大きなキャンパスとして整理する必要がありました。なので、大学の施設を地域に開放するだけでなく、本キャンパスが周辺エリアを上手く繋ぐ役割を担うためにはキャンパス1階をどう設計すべきかなどの検討も必要でした。また、大学施設なので教育研究活動を行う施設としての視点も当然必要です。このキャンパスのコンセプトは、「生活の全てをシミュレートする」なので、その時々やりたい活動に合わせて間仕切りを変更したり、空間そのものを簡易的に変更できるような設計としています。このほか、教員は一つの大部屋をフリーアドレスで使う形態となっていて、一人の教員が占有する通常の居室とは異なります。スタジオや工房も共有という点も同様です。そこに教育研究に必要なものを整理して配置する必要がありました。また、全個室型の男女共用トイレなども初めての経験でした。空間的には広いことに加えてガラス張りの間仕切りが多いので、施設内の見通しにも留意しました。

（墨田区）自分はもう少し機能的な視点になり

ますが……大学と自治体では当然、目指す目標もそれを実現するためのアプローチも異なります。最初はそのあたりのボキャブラリーの違いに戸惑うことが多かったです。なので、まずは自治体として何がこの事業、施設で実現したいか、何をやってほしいのか、何が提供できるのかを説明するところから始めました。ある程度、相互理解が進むと、地域住民のメリットとなることが大学の教育研究にも役立つと、共通の利益を見出すことができるようになり、ベクトルが一致した感じがしました。

（千葉大）相互理解のためにきちんと説明することは非常に重要だと自分も感じました。あと、今回はコンバージョンによる整備ということで、元々の建物があった空間を本学教員らのニーズに合わせてどう改修するかという点が難しく、また同時にクリエイティブでもありました。例えば4階では旧体育館を利用して大空間のインベーションアトリウムとして。一見、教育研究には使いにくいように見えるかも知れませんが、オーソドックスな施設では不可能な大規模なシミュレーションを行うことができます。そんな数々の発想に出会えたのが非常に楽しかったです。

—— ヒアリングに基づいたニーズ志向だけで施設を作るのではなく、ある意味では異質なものがら出発することで、これまでにない新しい空間や活動が生まれるのですね。

（千葉大）自己完結的なものだけではなく、不確定な要素をうまくハンドリングして新しいものをつくる

のも戦略的マネジメントと言えると実感しています。この視点は、自治体など大学以外の組織と連携するうえで欠かさないでしょう。

—— 最後に、これから地域の連携業務を行っていく職員に対してアドバイスをお願いします。

（千葉大）連携によって自分（大学）にどのような利益があるのか明確化すること、また相手を持つ課題は何で、その解決に自分たちの資産をどう生かせるかを伝えられるようにすることが一番かなと思います。また、ある利益を互いが取り合うのではなく、互いが協力することで、そもその利益をどう大きくすることができるか、という視点も重要だと思います。それが信頼関係に繋がりますし、具体的な施設等の整備時に相手方に要望を出すときに理解してもらいやすくなります。どのような連携でも言えますが、相手とは利害が一致することばかりとは限らないので、相互理解は重要だと思います。

（墨田区）それと関係して、長期的にどのような共通のメリットを見出せるかを話しておくことが大事だと思います。今の段階でいいので根拠もあるといいでしょう。というのは、連携は最初の整備時だけでなく何十年も続いていくものなので、そういった初心が失われると、なぜ連携しているのか分からなくなり、調整の妨げになったり、連携の破棄に繋がりがねないからです。その点では私たちもこれから本領が試されるところです。試行錯誤を続けていきたいです。

※写真撮影時のみマスクを外しております。

CLTを活用した地域の共創拠点 —大学のビジョンの実現に向けて— CLT×岡山大学

「地域の産業活性化のための新たな交流と共創の場」をコンセプトに建てられた岡山大学の「共育共創 commons」は、あらゆるプレイヤーが「共育共創」できるイノベーション commons の実現を目指した施設である。岡山県内で製造される環境に優しい木質系材料 CLT を活用した木造建築とすることで、SDGs 研究推進大学として、地域産業活性化やカーボンニュートラルに貢献する新たなシンボルとなっている。



■共育共創 commons【概要】
設計・施工：清水建設（株）
監修（基本設計含む）：岡山大学特別招聘教授 隈研吾
完成年月：2023年1月
建築面積：645.76㎡
延床面積：824.80㎡
構造：木造（CLTパネル工法）
階数：地上2階建て
発注方式：設計・施工一括発注方式
総事業費：約6.8億円
財源：学内予算の他、寄附及び国土交通省令和3年度
サステナブル建築物等先導事業（木造先導型）補助金

「共育共創 commons」は、

カーボンニュートラル・脱炭素社会に貢献する

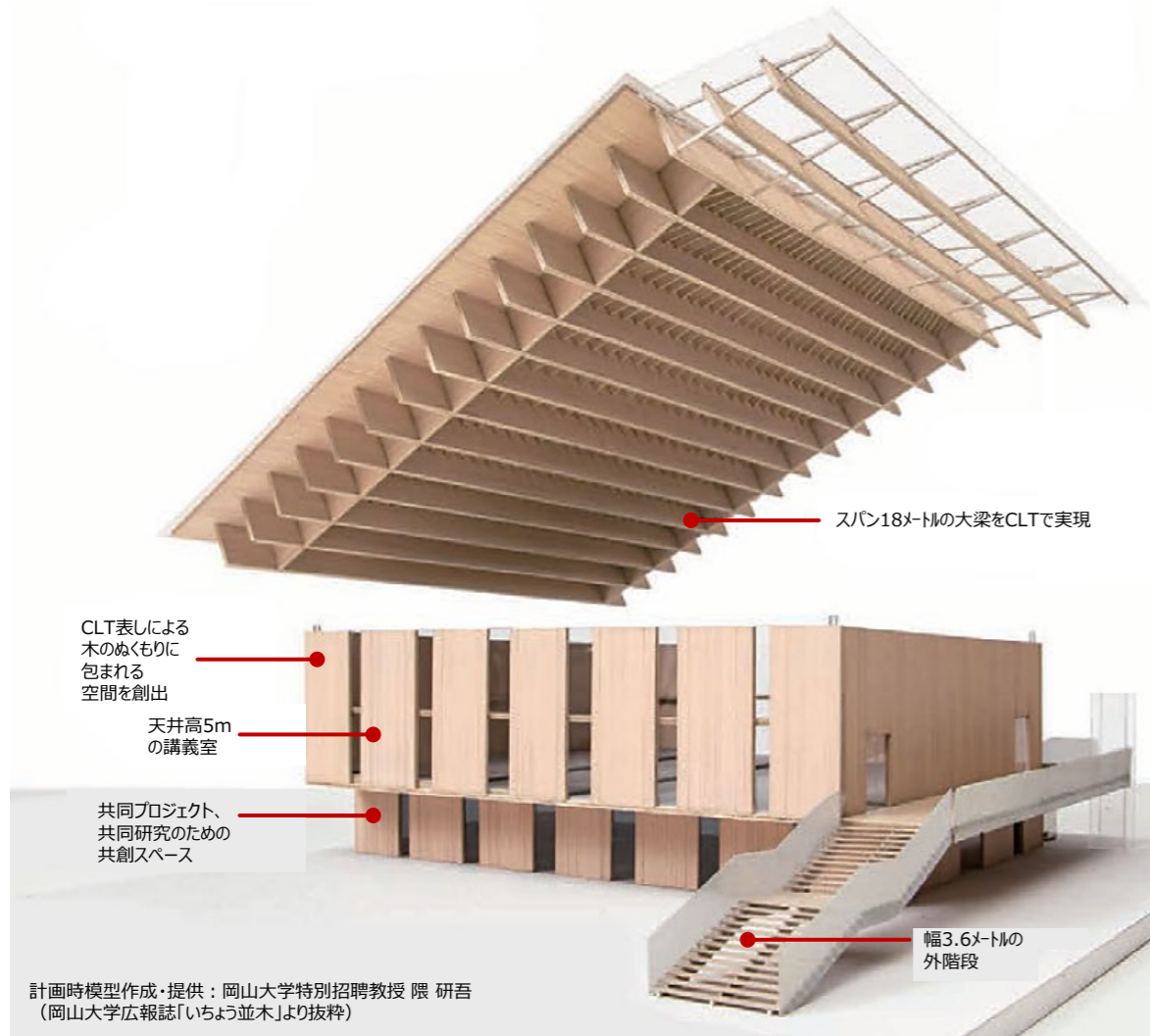
環境にやさしい、CLTを活用した木造建築。

実物教材として木質研究教育に貢献。

Concept

【構想】

「ありたい未来を共に育み、共に創る研究大学」を実現するシンボル。



大学ビジョンと共育共創 commons

岡山大学の新たなシンボルとして、誕生した「共育共創 commons」は、「岡山大学ビジョン3.0」に掲げる「ありたい未来を共に育み、共に創る研究大学」を実現するための活動拠点として令和5年1月に整備された。これまで、SDGs推進研究大学として、地域や企業の方々と様々な協働活動に取り組んできたことを、より一層充実させるものであり、あらゆるプレーヤーが「共育共創」できるイノベーション・commonsの実現を目指した施設である。

施設の特徴

最新のデジタル技術に関する講座やワークショップ、社会人と学生が共にアイデアを競い合うハッカソン^{※1}などの開催や、オープンな共同プロジェクトから機密性の高い共同研究まで幅広く活用可能なイノベーション空間として、2階には、300名収容の大規模講義室を設け、1階には、共同研究拠点としての「共創ラボ」機能を重点的に実装している。

また、2階講義室ではCLTパネル工法で前例のない無柱大空間を実現する新技術を開発・適用し、CLTの可能性を追求している。

CLT活用の背景

「共育共創 commons」は、カーボンニュートラル・脱炭素社会に貢献する環境に優しい木質系材料 CLT (Cross Laminated Timber) を活用した木造建築である。岡山大学の新しいシンボルとなる建物を造りたいとの思いから、岡山大学特別招聘教授の隈研吾先生に基本設計から施工管理まで監修いただいた。

また、岡山県産のCLTを使用することで、地域産業の活性化に寄与すると共に、岡山市、真庭市主催による「CLTセミナー・共育共創 commons 構造見学会」の合同開催を実施など、学内資産を活用した「脱炭素社会・地域循環共生圏 (ローカル SDGs)」^{※2}を牽引するための新たな協働事業にも貢献している。

新工学部の実践的教育を推進

「共育共創 commons」は、旧工学部と環境理工学部を再編統合して2021年4月に設立された新工学部の新しい学びの場でもあり、岡山県の地域特徴や地域資源を生かした、木質建築・森林保全活用の教育研究拠点として活用が始まっている。

また、工事中から学生や教職員等を対象とした説明会や見学会を開催するなど、学生達がCLTという素材や建築の仕組みに触れる場となっており、木質建築教育研究の実物教材として活用することで、工学系人材の養成に貢献している。

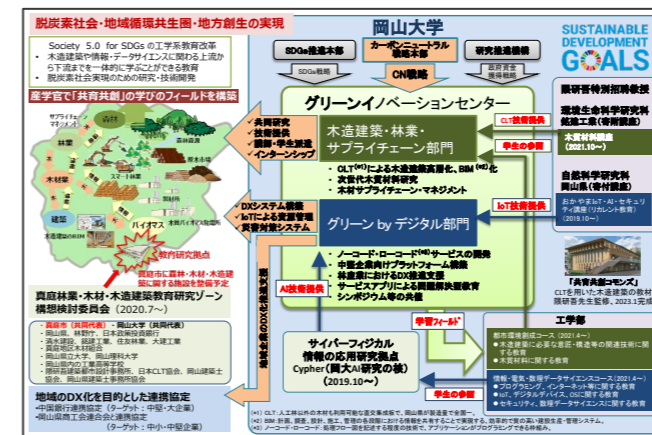
※1 ハッカソン：マラソンとハックを掛け合わせた造語。エンジニア、デザイナー、プランナー等がチームを作り、与えられたテーマに対し、短期間に集中してサービスやシステム等を開発し、成果を競うイベント。
※2 ローカルSDGs：各地域が美しい自然景観等の地域資源を最大限活用しながら自立・分散型の社会を形成しつつ、地域の特性に応じて資源を補完し支え合うことにより、地域の活力が最大限に発揮されることを目指す考え方。

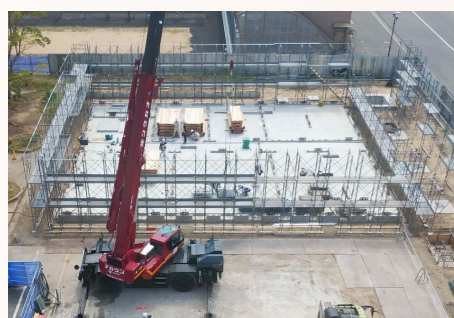
岡山大学特別招聘教授 隈研吾先生からのメッセージ

岡山大学共育共創 commonsは、CLTを活用した木造建築物の可能性を追求しました。岡山大学の学生が、いろいろな人のいろいろな意見や価値観を受け止めることのできる、大きくてやさしい人になってほしい願いを込めて設計しています。建築物は大きいけれど、その仕事はたくさんの人が協力して、小さなことの積み重ねでできていることを、この原寸大の教材から学んでください。

20世紀は、「密なハコ」にたくさんの人間を詰め込むことで効率を追求してきました。コロナの疫病は、それが人の幸せにつながらないことに気づかせてくれました。コロナの後を生きるみなさんは、この「木のハコ」で、人が本当に幸せになれる新しい生き方を考えてください。

(岡山大学広報誌「いちよう並木」より抜粋)





8月撮影
基礎コンクリート打設完了
1階CLT壁建方作業中

1 カ月



9月撮影
1階CLT壁建方完了
2階CLT床敷込作業中

1 カ月



10月撮影
2階床コンクリート打設完了
2階CLT壁建方完了
R階CLT梁地組据付完了
屋根CLT敷込作業中

1 カ月



11月撮影
屋根下地完了
庇鉄骨取付完了
屋根・鉄骨階段取付作業中

1 カ月



12月撮影
鉄骨階段取付完了
外壁仕上完了

1 カ月



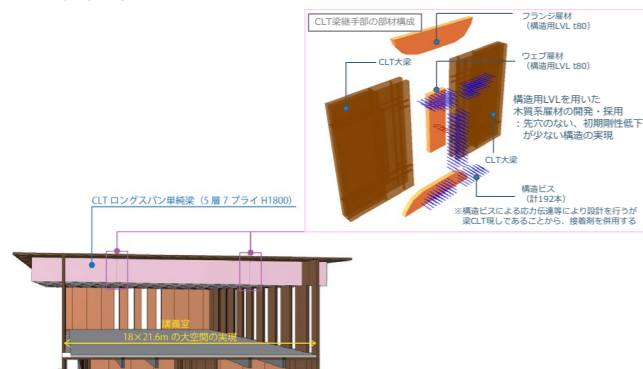
1月撮影
共有共創 commons 完成

CLTパネルの新たな可能性を追求する。

CLT大梁ジョイント・メタルレス構法

CLTパネル工法では国内初となるスパン18×21.6mの無柱大空間の実現に寄与する「CLT大梁ジョイント・メタルレス構法」の新技術を開発・適用し、CLT建築の新たな可能性を追求している。

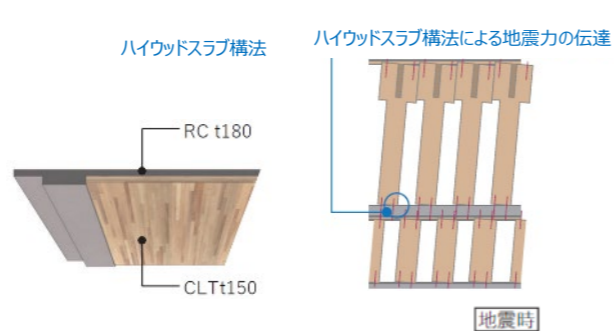
この新技術は、スパン18mを実現する梁成1.8mのCLT大梁において、接合部に木質系の挿入材（LVL）と構造ビスを用いた継ぎ手を採用する技術である。従来の金物で構成した接合部と比較し、先穴による初期剛性の低下を抑制するとともに、施工性を向上させる。CLTの生産・搬送面での制約を考慮し、3分割した部材を現場で接合してスパン18mのCLT大梁を形成し、18×21.6mの大講義室の上部を覆う大屋根を支持している。



新技術「CLT大梁ジョイント・メタルレス構法」

CLTランダムパネル構法

新技術「CLTランダムパネル構法」は、CLTを鉄筋コンクリート（RC）スラブの型枠兼天井仕上げ材として使用する「ハイウッドスラブ工法」を応用したもので、従来のCLTパネル工法で制約となっていたパネル配置の自由度を向上し、各階の用途構成や外観デザインに応じたパネル配置を可能にしている。ハイウッドスラブのRCスラブの一部に梁型を設け、RCスラブの梁型を介して上層のCLTから下層へ地震力を伝達させる。これにより、壁パネルの立面配置が上下階で異なる構造計画が可能になり、デザイン面の制約を最小限に抑制する他、各階の用途構成に応じたパネル配置を可能とする。



新技術「CLTランダムパネル構法」



2階講義室を活用した式典の風景

What's CLT

—施工が容易で頑丈な木の新たな構造材—

CLTとは、Cross Laminated Timberの頭文字を取ったもので、直交集成板と訳される。ひき板を繊維方向が直交するように積層接着したパネルで、そのため、縦・横両方向の力を受けられ、柱・梁の代わりに壁として建築物を支えることのできる構造材料である。

欧米を中心にマンションや商業施設などの壁や床として普及しており、我が国においても国産材CLTを活用した中高層建築物等の木造化による新たな木材需要の創出が期待されている。

(1) 組立ての工期を短縮

CLTパネルは予め工場でパネルを製造し、必要な加工を施して工事現場に搬入し、組立てて活用される。また、RC造などで必要となる型枠職人等、熟練工への依存も少なく、これらの観点から、工期の短縮が可能である。

例えば、高知県で国内最初のCLTパネル工法で建てられた建築物においては、構造躯体部分の組立てが2日間で完了するほどスピーディーな施工である。

(2) コンクリートより軽量で基礎工事が簡素化

構造材をコンクリートの代わりにCLTとすれば、建物の重量が軽くなり、基礎工事等の簡素化が可能である。

(3) 高い断熱性能

CLTは構造材料の中では、それ自体の断熱性能が高く、例えば120cmのコンクリートと9cmのCLTが同等の断熱性能を持っているとされている。そのため、より高断熱の建築としやすく、場合によっては別途、断熱・仕上材を使わずに内装として現しあらわで活用でき、工期の短縮につながる。

(4) 造形の自由度が高い

CLTは、曲線も含め、加工工場等で予め必要な形状にくりぬいて使用することが可能で、原版のサイズの範囲内であれば、比較的自由に造形することが可能である。

(5) 高い寸法安定性

CLTは繊維方向が直交するように積層接着することで、互いの層が変形を抑えあうため、製材よりも寸法の変化を小さく抑えることが可能である。



CLTパネル (スギ)



木の学校づくり 学校施設等のCLT活用事例 (令和2年3月)

文部科学省では、学校施設等の木材利用におけるCLT等の新たな木質部材の利用促進の一つとして、CLTを活用した学校施設等の事例集を取りまとめました。本事例集は、学校施設等において実績が蓄積されてきたことから、その事例をメリットや特徴も踏まえ、全国の学校設置者や設計会社等の関係者の皆様に広く紹介し、普及を図ることを目的として取りまとめたものです。

https://www.mext.go.jp/a_menu/shisetu/mokuzou/mext_00525.html

文部科学省HPから
 トップ > 教育 > 学校等の施設整備 > 学校施設的环境対策 > 木の学校づくり
 > 木の学校づくり 学校施設等のCLT活用事例

CLT導入事例

宮崎大学 創立330記念交流会館

CLTをトラスの斜材として使用した珍しい利用方法であり、またCLTを使用した宮崎県内初の建築物である。



竣工	2014年9月
延床面積	1,670.25㎡
使用したCLT	36㎡
CLT利用部分	トラス梁の斜材
CLTサイズ	厚さ72mm (3層3プライ)
構造	木造 (軸組工法CLT利用)

東北大学 建築CLTモデル実証棟

スタジアム状のデザインが特徴的である空間をCLTパネル工法を用いて実現している。壁、床にCLTを使用し、せん断接合部には所要の耐力と剛性を有した木ダボ接合を用いた。内部は意匠・構造・設備が融合したCLT空間としている。



竣工	2017年12月
延床面積	90.36㎡
使用したCLT	14.9㎡
CLT利用部分	壁、床
CLTサイズ	(最大) 150 x 1,100 x 2,400mm (5層5プライ)
構造	CLTパネル工法

糸島市九州大学国際村構想 —地域との連携—

九州大学×糸島市

【国際ホテル】

- ・85室（シングル48室、ツイン27室）
- ・大浴場 約120㎡
- ・コンベンションルーム（120名立食可）
- ・レストラン

【国際寮】

- ・総戸数240戸
- ・1日2食の食事付（ムスリムフレンドリー）
- ・コミュニティスペース、学習室、礼拝室等を完備
- ・日本人学生と留学生が入居する混合型学生寮

伊都キャンパスへの移転が進み教育研究活動が活性化中、留学生や外国人研究者の宿舎・居住施設が大幅に不足したことから、地元の糸島市が主導となり産学官の「地域の国際化に関する連携協定」を締結。協定に基づき、民間資金による国際寮・国際ホテルが整備され、大学の国際化と地域の活性化に大きく貢献。

Concept

【構想】

21世紀の「知の時代」に相応しい 地域の「知の拠点」、「知的クラスター」づくりを目指して



OPACK資料より引用
九州大学学術研究都市構想イメージ



九大前不動産HPより引用
家具・家電の完備（国際寮）



九大前不動産HPより引用
リフレッシュに最適なコミュニティスペース（国際寮）

糸島市及び九州大学を中心とした関係5者による、地域の国際化に関する協定締結の際に、当時の総長である久保元総長は「キャンパス周辺に『国際村』ができることは本学にとっても大変素晴らしいことである。九州大学が教育・研究を通じて糸島の地域の国際化のために重要な役割と責任を果たしていきたい。」（平成29年5月30日）と述べていたが、それが実現に向けて着実に進みつつある。

九州大学伊都キャンパスの南側（泊カツラギ地区）は、移転が本格化する以前から、地元糸島市を中心としたまちづくりが開始されていた。大学の開発当初は夜間の騒音など地元住民から不安の声が挙がっていたものの、学生・留学生と住民の交流が進んでいくにつれ、大学門前町としての発展に期待が寄せられるようになった。

移転が進むことで、教育研究活動が活性化され、留学生の居住施設や外国人研究者の長期滞在施設の不足が深刻化するようになった。この問題に対応するため、平成29年度に「糸島市九州大学国際村構想（糸島市）」を策定し、構想を実現するため、九州大学、糸島市、（株）西日本シティ銀行、セトル（株）、（株）西日本フィナンシャルホールディングスの産学金官で「地域の国際化に関する連携協定」が締結された。

この協定を契機に、令和2年8月、九州大学伊都キャンパスから徒歩4分の好立地に、まずは国際寮（240戸）を、翌3年8月には、国際ホテル（85室）が開設された。どちらも民間主導で進められた事業で総工事費は約34億円であった。これにより、九州大学でも課題になっていた、留学生寮やゲストハウスの問題が外部資金により解決の糸口を見た。

令和2年、新型コロナウイルス感染症が蔓延し、社会活動が

停滞する中でも、こういった取組で、平成29年度末に国際村内に27名だった外国人数が、令和4年8月末時点では137名の約5倍まで増加してきている。

糸島市はこれまで、少子高齢化が進む閑静な地域であったが、学生・留学生等の受入れ拠点となることで活性化されてきている。

その中でも、希少な国際ホテルに大学関係者のみならず観光客の宿泊も増えることで、国際的な大学門前町として国内外から注目を集めている。

「糸島市九州大学国際村構想」に基づくまちづくりにより、世界各地から訪れる留学生・研究者に対し、九州大学・糸島市の国際的な姿勢を打ち出すことで、活発な国際交流や世界最先端研究を行う研究者の招聘加速など、九州大学の教育研究に対する効果も期待されている。

今後も、九州大学として教育研究の推進や、企業との共同研究の強化等によって、学生、留学生、研究者等が集まるための改革を進め、実績を積み上げていくことで、地域の活性化に寄与し、また、糸島市や銀行や企業と連携し、民間資金等を活用した居住・宿泊施設の整備を進めるなど協定に基づく取り組みを継続し実施することで、九州大学の国際化を更に推し進めるだけでなく、糸島市の地域活性化の起爆剤として貢献していく予定である。

また、国際化だけではなく「九州大学学術研究都市構想」を踏まえ、先導的の大学改革と伊都新キャンパスへの統合移転といった一連の動きを総合的・立体的にとらえ、21世紀の「知の時代」にふさわしい「知の拠点」「知的クラスター」づくりも目指している。

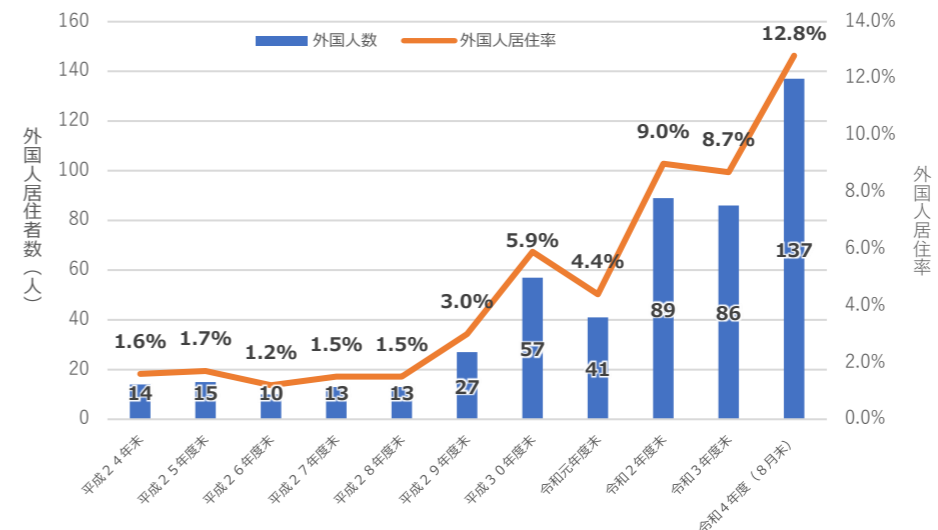
糸島市における九州大学キャンパス周辺のまちづくり



※糸島市作成



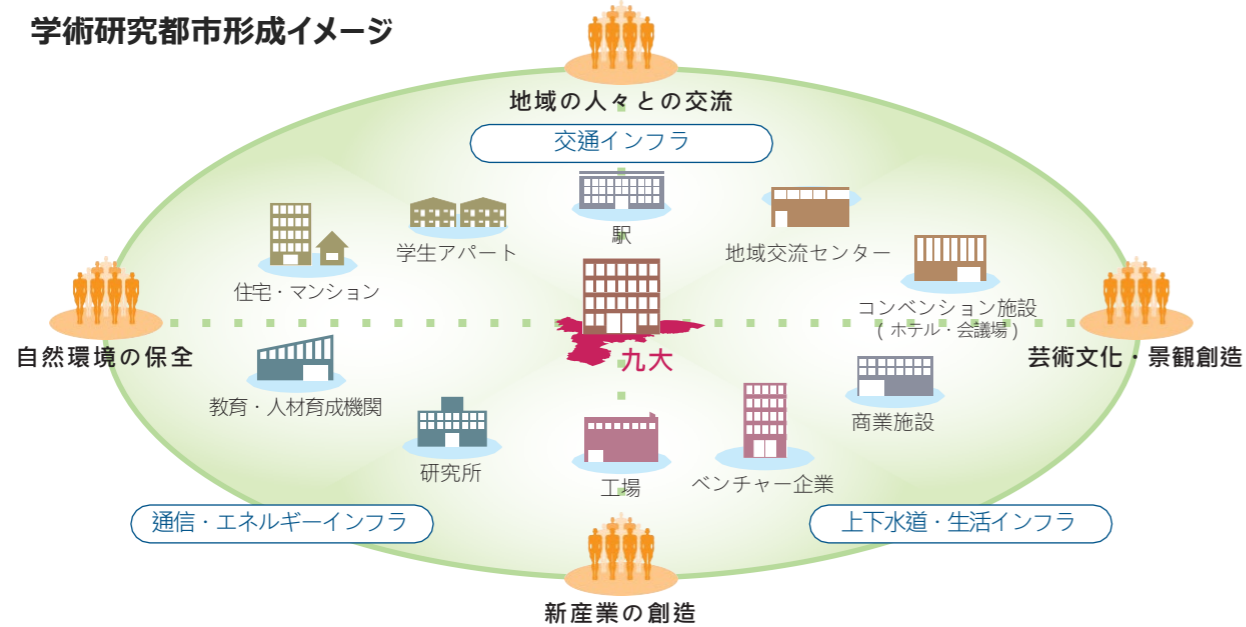
九州大学国際村における外国人居住数・率の推移



九州大学国際村における外国人居住数・率の推移は右のとおりで、平成29年に協定を締結して以降、順調に増加してきていたが、新型コロナウイルス感染症の影響によって令和元年度末に数・率ともに減少した。しかし、規制が緩和されてきた令和2年度末には新型コロナウイルス感染症蔓延以前よりも多い外国人を受け入れることができる。令和4年8月末時点では、協定締結前年度の平成28年度末と比較すると10倍の人数が居住し、居住率についても大幅に上昇してきており、本協定締結及び国際村構想が大きく外国人の受け入れに好影響を及ぼしてきたことがうかがえる。

「糸島市サイエンス・ヴィレッジ」と「国際村」が連携しながら、地域活力の創出を図り、グローバルに持続的な発展を続ける学術研究都市の構築をめざす

学術研究都市形成イメージ



平成13年に、21世紀の「知の時代」に相応しい地域の「知の拠点」、「知的クラスター」づくりを目指して、「九州大学学術研究都市構想」を策定し、九州経済連合会、福岡県、福岡市、糸島市、九州大学で構成する九州大学学術研究都市推進協議会を中心に、学術研究都市の実現に向けて取り組んできている。

その中で、九州大学と糸島市が、研究の実用化や事業化につなげるためのサイエンスパーク設置に向けた組織対応型連携共同研究を平成29年度から着手し、具体化に向けて「糸島サイエンス・ヴィレッジ (SVI) 構想」を策定 (平成30年度) することで、研究者が滞在できる機能、生活利便性を向上させる機能を周辺の森に調和配置し、企業関係者や地元住民との交流を促す計画を樹立した。

また、令和3年10月1日には、推進母体となる「一般社団法人SVI推進協議会」を九州大学、糸島市を含む産学官で連携する形で設立した。

さらに、SVIを九州大学学術研究都市構想に掲げた、民間の力を借りながら開発を行う地域核 (通称「ほたる」) の1つに位置付け、「国際村」と連携しながら地域活力の創出を図りグローバルに持続的な発展を続ける学術研究都市の構築を目指している。

SVI構想実現のためのはじまりの地は、九州大学隣接地の一角の市が所有している「旧清掃センター」。平成11年に閉所して以来使われずそのまま残されていた土地・建物を有効活用する形で始まった。議論の末にSVI実現のためには大規模開発などを行う前に、SVIに興味がある方の実証実験などが可能な「スタート」の場が必要という結論に至りここからスタートすることになった。

プロジェクト第1弾として、自己土地のみで活用できる第5世代移動通信 (ローカル5G) の機器を「はじまりの地」に実装することで新たな一歩を踏み出した。

九州大学農学部の学生を中心に六次産業化実現に向け活動している、九州大学農業研究活動団体「QSIP」が農業×5Gの実証実験 (温度・湿度・照度などの環境計測をリモート管理等) を計画。実証に必要な「菜園」づくりを地域住民の協力を得て実施した。

実証実験の幅を更に広げ、九州大学発祥の各種研究の社会実装、学生の起業拠点となることを目指しており、ベンチャーキャピタルや民間企業研究所、地元住民との交流施設、中長期滞在施設などの整備を進め「集い、つながり、創り出す科学の村」の実現を描いていく。



撮影 中村 翔一

★はじまりの地となる九州大学隣接地



★学生による耕作



対象地域：糸島市志摩馬場地区
糸島市東部に位置し、九州大学伊都キャンパスの西側に隣接

九州大学伊都キャンパス西側周辺において、基礎研究を実用化・事業化につなげる応用研究機関の集積に加え、さまざまな分野の研究者や企業関係者が集い新たなことを生み出すオープンイノベーション機能、ベンチャーを育成する機能、研究者たちの滞在・生活利便機能、大学・企業・地域の交流機能などを有した、環境共生の「科学の村」です。

サイエンスパークを、より大学・企業・地域が一体となった、研究者や大学関係者の暮らしも含めた拠点として捉えたものです。

九州大学が一部立地する糸島市では、1,600人以上の学生が生活していますが、大学卒業後は関東圏で就職するなど、多くの優秀な人材が域外に流出しており、地元への定着率が高くありません。

糸島サイエンス・ヴィレッジは、九州大学から徒歩15分に位置し、学生時代から企業の研究環境と触れることで、域内に学生が定着し、九州大学を中心として糸島市が発展することで、さらなる九州大学の魅力を広げることができます。

凡例

学術研究都市コアゾーン

九州大学伊都キャンパスと周辺地域から構成され、学術研究都市形成において先導的で中心的な役割を果たす、研究・開発機能等や新たな居住地域等が集積するゾーン。

タウン・オン・キャンパス

九州大学センターゾーンと隣接する南側地区、北側地区を一体的に整備し、学術研究都市の「顔」「シンボル」となるゾーン。研究開発、国際交流、産学連携、学生住居、宿泊・コンベンション等、多様な機能を導入。

分散型地域核 (ほたる)

研究開発や産業機能、研究・開発企業、さらには新たな居住の受け皿として展開。

※自然や景観と共生できることを原則とする。

地域骨格軸 地域ネットワーク道路

環境と福祉への対応を考慮し、公共交通とパーソナル交通のバランスを図りながら、学研都市にふさわしいゆとりを持ったU悠トランジット (University悠トランジット) を形成。

市街地形成ゾーン

地域拠点ゾーン

田園ゾーン

<自然農業保全・共生ゾーン>

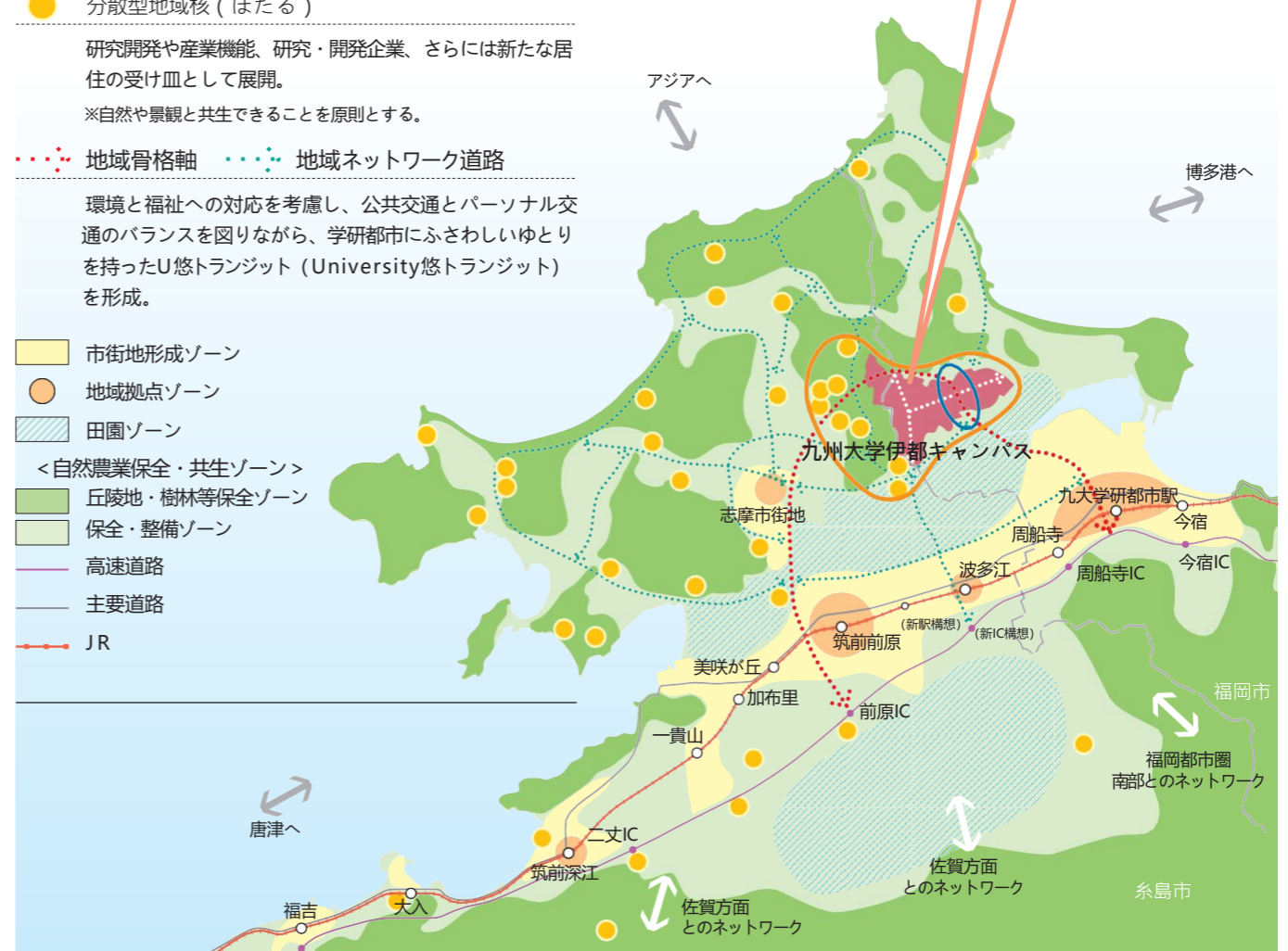
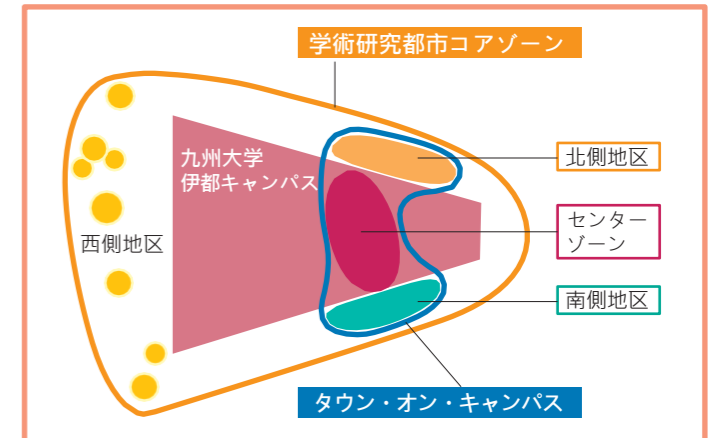
丘陵地・樹林等保全ゾーン

保全・整備ゾーン

高速道路

主要道路

JR



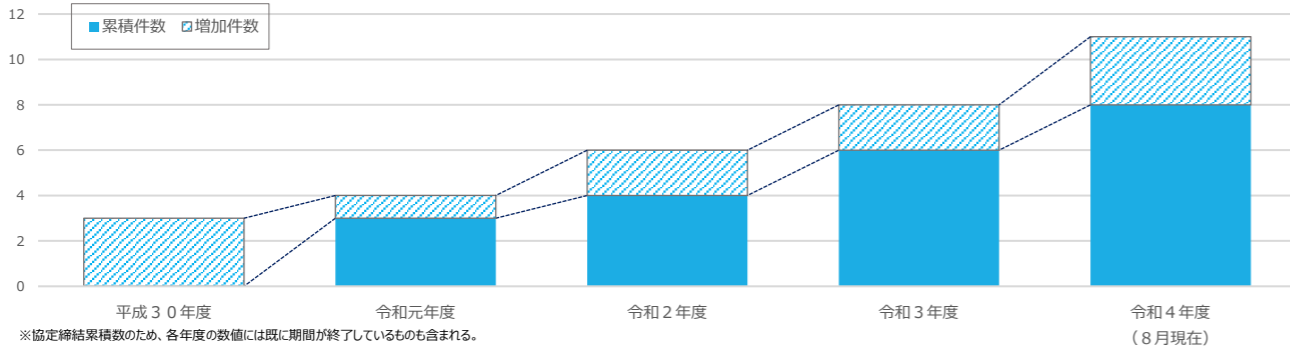
※ほたるの配置および道路のネットワークはあくまでイメージであり、位置を定めたものではありません。

Progress

【進捗】

ネーミングライツ（施設命名権）による施設の有効活用 神戸大学×ネーミングライツ

ネーミングライツ協定累積数の推移



令和4年9月1日に、神戸大学とSKY株式会社が「大学施設のネーミングライツ（命名権）取得に関する協定」を締結した。これで神戸大学では12施設目となった。

平成30年4月の初めての協定締結から令和4年で約4年が経過したが、今なお神戸大学ではネーミングライツの取組は継続している。

そもそも、ネーミングライツとは、教室等の施設命名権を付与することで、企業等から料金を徴収する制度であり、学内でネーミングライツに関する基本方針を策定する必要がある。企業としては、自社の名前を施設名にすることで認知度の向上を図ることができ、契約した施設では広告スペースも提供している。

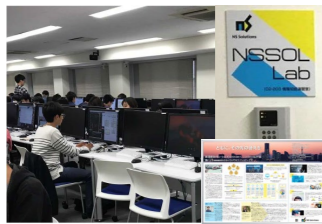
さらに、企業等が参画しやすいスキームの検討も重要であり、対象施設、応募資格等について条件を整理・検討、事前のマーケティング結果を踏まえ、教室等を選定し、ネーミングライツの募集を実施している。募集はホームページによる公募により、選定委員会にてネーミングライツ・パートナーを選定している。

また、ネーミングライツ料の50%は研究科の予算として建物維持管理や修繕等に使用し、残りの50%は大学本部が大学全体や基金関係の予算として使用している。

ネーミングライツの効果は、令和元年度事例集では「3社と協定を締結し、年間430万円の収入を確保（平成30年12月現在）」としていたが、令和4年10月現在、10社との協定が継続しており、年間約2,600万円の収入を確保できている。この効果は学内でも評価が高くネーミングライツを希望する部局も増えている。今後の展開としては、いかにして企業に関心を持たせるかということが課題であり、ネーミングライツを設定できる施設の洗い出しや企業のニーズを調査し、企業への売り込みを実施することで協定締結件数の増加を図っていくとしている。

令和4年7月にネーミングライツ施設として開設した「chip 1 stop ROKKO VIEW」の名付け親である株式会社チップワンストップの高乗代表取締役社長は、神戸大学理学部を卒業後、経営学研究科も修了されており、深い母校愛を示されるとともに、「今回の締結を機に神戸大学との連携を深め、人材育成や優れた研究成果を生み出すために協力していきたい」とコメントされている。

ネーミングライツの公募にあたってはこういった事例も踏まえ、HPでの公募だけではなく、卒業生や関係者への声掛けも重要になってくると考えられる。



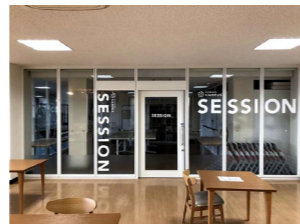
(六甲台2団地) 工学研究科情報知能演習室



(深江団地) 2号館学生フリールーム



(六甲台2団地) 工学部食堂



(鶴甲1団地) A棟ミーティングルーム

○ネーミングライツ施設

2022年10月1日現在

大学名	施設名	施設種別	相手先	契約期間
宮城教育大学	内田洋行フューチャーラームラボ (FCR Lab.)	講義室	株式会社内田洋行	5年
山形大学	ニコニドームやまがた	教育研究施設	株式会社ニコニ	8年
山形大学	日本電子やまがた産学連携構造解析センター	共同利用施設	日本電子株式会社	3年
筑波大学	大和リースコミュニティステーション	宿泊施設	大和リース株式会社	5年6か月
筑波大学	CHUBU UT Field	屋外体育施設	株式会社チュウブ	3年
宇都宮大学	セキスイハイムさくら寮	学生寮	栃木セキスイハイム株式会社	10年
東京大学	NSSOL Learning Studio	講義室	日鉄ソリューションズ株式会社	5年
東京大学	Sky Lecture Room	講義室	Sky株式会社	5年
東京大学	オルクドールテラス	中庭	東海東京証券株式会社	5年
東京医科歯科大学	SHIMADZU 御茶ノ水 SHARE LABO	研究室	株式会社島津製作所	2年4か月
東京医科歯科大学	ノイシュタット ジャパン ルーム	実習室	ノイシュタットジャパン株式会社	3年
東京医科歯科大学	ジーシー クリニカルラボラトリー	診療室	株式会社ジーシー	1年10か月
東京工業大学	千代田テクノルコバルト照射施設	教育研究施設	株式会社千代田テクノ	2年10か月
東京海洋大学	ワールドマリンカフェ	食堂	ワールドマリン株式会社	3年2か月
お茶の水女子大学	NSSOL Kitchen	食堂	日鉄ソリューションズ株式会社	6年
お茶の水女子大学	NSSOL IS-Room	講義室	日鉄ソリューションズ株式会社	6年
お茶の水女子大学	Sky Global Learning Commons	ラーニングcommons	Sky株式会社	3年
電気通信大学	武蔵エンジニアリング株式会社講義室B101	講義室	武蔵エンジニアリング株式会社	5年
電気通信大学	武蔵エンジニアリング株式会社講義室B102	講義室	武蔵エンジニアリング株式会社	5年
電気通信大学	九電みらいホール	講義室	九電みらいエナジー株式会社	3年
電気通信大学	アフラックホールUJEC	講堂	アフラック生命保険株式会社	3年
上越教育大学	東京書籍Edu Studio (エデュ スタジオ)	ラーニングcommons	東京書籍株式会社	3年
福井大学	セーレングローバルバブ	支援施設	セーレン株式会社	非公表
山梨大学	TC Room T1-11	講義室	東芝キャリア株式会社	3年
静岡大学	TC Room24	講義室	東芝キャリア株式会社	3年
静岡大学	ROHM Hamamatsu Room 2-11	講義室	ローム浜松株式会社	3年
静岡大学	Development Base	学習スペース	ローム浜松株式会社	3年
静岡大学	Roland DG Lounge	ラウンジ	ローランドディー・ジー株式会社	3年
静岡大学	IAIRoom34	講義室	株式会社アイエイアイ	3年
名古屋大学	服部国際奨学財団ホール	学習スペース	公益財団法人服部国際奨学財団	4年6か月
名古屋大学	ネオレックスプレイス	多目的ホール	株式会社ネオレックス	4年
名古屋大学	ネオレックスプレイスセミナールーム	セミナー室	株式会社ネオレックス	4年
名古屋大学	ビズリーチ・キャンパス名大	学生ロビー	株式会社ビズリーチ	4年2か月
愛知教育大学	EDU-LABO 大日本図書	支援施設	大日本図書株式会社	3年
愛知教育大学	東京書籍 Edu Studio	支援施設	東京書籍株式会社	3年
愛知教育大学	日本文教出版 Atelier Nichibun	多目的スペース	日本文教出版株式会社	3年
愛知教育大学	未来とつながる TELECUBE by OKAMURA	ラウンジ	株式会社オカムラ	1年
大阪大学	NSSOL Café	食堂	日鉄ソリューションズ株式会社	3年
大阪大学	DAICEL Studio	教育研究施設	株式会社ダイセル	3年
大阪大学	TPSCo Commons	ラーニングcommons	タワーマートナース セミコンダクター株式会社	3年
大阪大学	TPSCo Lounge	ラウンジ	タワーマートナース セミコンダクター株式会社	3年
大阪大学	Sky Innovation Studio	ラーニングcommons	Sky株式会社	3年
大阪大学	Sky Lecture Room	講義室	Sky株式会社	3年
大阪教育大学	東京書籍 Edu Studio	ラーニングcommons	東京書籍株式会社	3年
大阪教育大学	Sky Escalator	エスカレーター	Sky株式会社	3年
神戸大学	NSSOL Lab (エヌエスソラボ)	演習室	日鉄ソリューションズ株式会社	5年6か月
神戸大学	TATSUMI Lounge (タツミラウンジ)	ラウンジ	株式会社辰巳商會	5年
神戸大学	WORLD MARINE Lounge (ワールドマリンラウンジ)	ラウンジ	ワールドマリン株式会社	3年
神戸大学	ビズリーチ・キャンパス SESSION (ビズリーチ・キャンパス セッション)	ラウンジ	株式会社ビズリーチ	3年
神戸大学	木村化工機教室LR203	講義室	木村化工機株式会社	3年
神戸大学	KCPC Entrance (ケーシーピーシーエントランス)	エントランス	木村化工機株式会社	3年
神戸大学	KONOIKE Garden (コノイケガーデン)	中庭	株式会社鴻池組	1年
神戸大学	Sky Dining (スカイダイニング)	食堂	Sky株式会社	3年
神戸大学	chip 1 stop ROKKO VIEW (チップワンストップラウンジビュー)	ラウンジ	株式会社チップワンストップ	3年
神戸大学	Sky Commons (スカイcommons)	ラーニングcommons	Sky株式会社	3年
奈良女子大学	SHI Café Dear deer!	食堂	住友重機械工業株式会社	3年11か月
奈良女子大学	DMG MORI棟 (工学系H棟)	講義室・研究室	DMG森精機株式会社	10年
岡山大学	OG Wellness SALON	ラーニングcommons	オージー技研株式会社	3年
岡山大学	ムラタアカデミア (Murata Academia)	多目的スペース	株式会社岡山村田製作所	3年
岡山大学	ムラタスクエア (Murata SQUARE)	多目的スペース	株式会社岡山村田製作所	3年
広島大学	KATO OMOSHIRO LAB	研究室	株式会社加藤組	5年
広島大学	KKM ROOM 104	講義室	株式会社ディスコ	2年2か月
広島大学	FUJIKIKAIKOUGYO 102	講義室	富士機械工業株式会社	3年
広島大学	jcs ROOM 108	講義室	株式会社日本クライメイトシステムズ	3年
広島大学	jcs Lounge	ラウンジ	株式会社日本クライメイトシステムズ	3年
広島大学	Micron Innovation Hall	講義室	マイクロメモリ ジャパン株式会社	1年
広島大学	MNES Lecture Hall	講義室	株式会社エムネス	3年
広島大学	豊国工業 E25 105実験室	研究室	豊国工業株式会社	3年
山口大学	向学社ラウンジ	ラウンジ	株式会社向学社	3年
九州大学	エヌエスソラ ラウンジ	情報学習室	日鉄ソリューションズ株式会社	6年
九州大学	スタディパーク	情報学習室	ソニーセミコンダクタマニアックチャリング株式会社	3年
九州大学	スカイ きゅうと commons	ラーニングcommons	Sky株式会社	3年
九州大学	スカイ キュー プリッジ	学習スペース	Sky株式会社	3年
宮崎大学	Rホール	講義室	株式会社菱熱	3年
宮崎大学	NSCエネルギースクエア	太陽光発電施設	ニュースターコミュニケーションズ株式会社	3年
鹿児島大学	菱熱ホール	講義室	株式会社菱熱	3年2か月
鹿児島大学	菱熱ルーム	講義室	株式会社菱熱	3年2か月
鹿児島大学	SINKA Room	講義室	株式会社BANANA	1年
琉球大学	R's Kitchen	食堂	株式会社菱熱	6年2か月
琉球大学	アスティーダアリーナ	体育施設	琉球アスティーダスポーツクラブ株式会社	3年
琉球大学	全保連ステーション	支援施設	株式会社全保連	3年
琉球大学	ビーンズストリート	道路	株式会社ビーンズラボ	3年10か月
奈良先端科学技術大学院大学	エアアイ大講義室	講義室	株式会社エアアイ	5年
奈良先端科学技術大学院大学	Rethink バイオサイエンス大講義室	講義室	日本たばこ産業株式会社	3年
奈良先端科学技術大学院大学	Rethink 物質創成科学大講義室	講義室	日本たばこ産業株式会社	3年